

# 2011年度わが国貿易収支、経常収支の見通し

2010年12月3日(金)  
社団法人 日本貿易会

## I. 要旨

### 1. 商品別貿易の見通し(通関ベース)

#### ● 2010年度 ~ 前年度の反動から、輸出入ともに大幅な増加

輸出総額は、前年度比 14.5%増の 67 兆 5,980 億円。前年度の大幅な落ち込み(同 17.1%減)の反動から、1980 年度以来の高い伸びとなる。内訳を見ると、輸出数量は、同 16.0%増と高い伸びとなるが、輸出価格は、円高等を背景に同 1.5%減と 3 年連続で低下する。

輸入総額は、前年度比 13.9%増の 61 兆 2,570 億円。輸入数量は同 11.2%増、輸入価格は同 2.7%増。輸入価格は、資源価格上昇の影響はあるものの、円高等を背景に、緩やかな伸びにとどまる。

#### ● 2011年度 ~ 輸出入ともに伸び率鈍化。特に、国内需要の低迷から、輸入は低い伸び

輸出総額は、前年度比 4.0%増の 70 兆 3,330 億円。輸出数量は、同 4.0%増と増加傾向が続く。ただし、輸出数量を水準で見ると、107.3(2005 年=100として指数化)にとどまり、2008 年度(98.8)は上回るものの、金融危機前の 2007 年度(115.3)を依然として下回る。また、輸出価格は為替レートの影響が低減することを主因に横ばい。

輸入総額は、前年度比 1.0%増の 61 兆 8,710 億円。輸入数量は、国内需要の回復力が乏しいことから、同 0.5%増にとどまる。輸入価格は、同 0.6%増と低い伸びとなる。

### 2. 経常収支の見通し

#### ● 2010年度 ~ 経常収支黒字は貿易・サービス収支黒字の拡大から 2 年連続の増加

経常収支は、所得収支黒字はわずかに縮小するものの、貿易・サービス収支黒字が増加することから、16 兆 6,970 億円と、2 年連続で黒字が拡大。

貿易収支黒字は、輸出の伸びが輸入を上回り、前年度比 1 兆 5,120 億円増の 8 兆 1,120 億円。サービス収支赤字は 1 兆 7,740 億円と、赤字幅縮小の動きが継続する。この結果、貿易・サービス収支黒字は 6 兆 3,380 億円となり、2 年連続で増加。一方、所得収支黒字は、円高を主因に、11 兆 5,860 億円と前年度からやや減少。

#### ● 2011年度 ~ 経常収支黒字は 20 兆円目前まで回復。過去 3 番目の高水準

経常収支黒字は、貿易・サービス収支黒字、所得収支黒字の拡大から 19 兆 2,320 億円と前年度に続いて増加。

貿易収支は、輸出の伸びが輸入を上回り、貿易収支黒字は 9 兆 7,760 億円と、黒字拡大が継続。一方、サービス収支赤字は 1 兆 7,270 億円と、前年度からやや減少する。この結果、貿易・サービス収支黒字は、前年度比 1 兆 7,110 億円増の 8 兆 0,490 億円となる。また、所得収支黒字は、経常収支黒字の継続により、対外純資産が拡大していることから、同 8,070 億円増の 12 兆 3,930 億円を見込む。

お問い合わせ :

社団法人日本貿易会 調査グループ

〒105-6106 港区浜松町 2-4-1 世界貿易センタービル 6F

Tel: 03(3435)6322 Fax: 03(3435)5979 e-mail: iar@jftc.or.jp

<http://www.jftc.or.jp> …HPより全文ご入手いただけます。

## Ⅱ. 総括表

### 【 通 関 貿 易 】

	2009年度 実績		2010年度 見込み		2011年度 見通し	
	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)
<b>通関貿易収支</b>	5,232	+5,997	6,341	+1,109	8,462	+2,121
<b>輸 出</b>	59,013	(-17.1%)	67,598	(14.5%)	70,333	(4.0%)
数量要因		-9.9%		16.0%		4.0%
価格要因		-7.0%		-1.5%		0.0%
<b>輸 入</b>	53,781	(-25.2%)	61,257	(13.9%)	61,871	(1.0%)
数量要因		-7.3%		11.2%		0.5%
価格要因		-18.5%		2.7%		0.6%

### 【 経 常 収 支 】

	2009年度 実績		2010年度 見込み		2011年度 見通し	
	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)
<b>貿易・サービス収支</b>	4,781	+5,669	6,338	+1,557	8,049	+1,711
<b>貿易収支</b>	6,600	+5,441	8,112	+1,512	9,776	+1,664
輸 出	55,567	(-17.9%)	64,035	(15.2%)	66,940	(4.5%)
輸 入	48,967	(-26.4%)	55,923	(14.2%)	57,164	(2.2%)
<b>サービス収支</b>	▲ 1,819	+228	▲ 1,774	+45	▲ 1,727	+47
<b>所得収支</b>	12,076	-2,477	11,586	-490	12,393	+807
<b>経常移転収支</b>	▲ 1,076	+254	▲ 1,227	-152	▲ 1,210	+17
<b>経常収支</b>	15,782	+3,446	16,697	+915	19,232	+2,535

(注)金額は億円単位を四捨五入

## Ⅲ. 当会見通しの特徴

日本経済が高齢化という構造要因を抱える中で、海外市場に需要を求めなければならないというのは、ある種のコンセンサスとなっている。一方で、わが国の貿易活動を取り巻く環境には大きな変化が見られる。

ここ数年の趨勢的な円高で、企業活動における各種コストの内外格差が広がり、輸出財における競争力が低下している。一部の産業では企業によるコスト吸収の努力が限界に近付いたことで、従来に増して製造拠点の海外移転の動きが強まっており、自動車などの基幹産業においても海外生産の逆輸入といった形態が出現している。

逆の興味深い動きも見られる。新興国からの低廉な輸入品の一部では、生産国における人件費の上昇やより付加価値の高い産業への転換による生産縮小などで、一時的な輸入減少や輸入先のシフトが起こる可能性がある。

このように、M&A の浸透などに伴う経済活動のグローバル化とともに、調達、製造、販売など一連の生産活動には無数のパターンが想定されることとなり、貿易の動向はこうした構造的な変化を抜きにしては見通せなくなっている。当会の貿易見通しは、専門委員会に参加する8商社が社内外に対するヒアリングに基づき商品別動向を予測、その積み上げをベースに作成されている。そのため、こうした構造要因を反映させることが可能となっている点が特徴である。

GDP、すなわち国内における生産という視点で見れば、海外生産への傾斜は国内雇用の喪失などを引き起こし、経済成長にはネガティブな要因である。もちろん望ましい姿とは言えないが、国民所得という観点で言えば、海外現地法人における内部留保や、本国へのロイヤリティ・配当等の支払は、国際収支におけるサービス収支や所得収支のプラス要因となり、国民経済へのネガティブな影響をある程度和らげる。当委員会では経常収支の予測も合わせて作成しており、そこには重要度を増しているこれら収支の予測も含まれる。

## IV.商品別貿易の見通し(通関ベース)

### 1. 輸 出

#### ◆◆◆2010年度◆◆◆

世界経済は、昨年後半以降の回復基調が続いているものの、世界的に景気刺激策の効果や在庫復元の動きが一巡していること等から、回復ペースが鈍化している。輸出は、こうした世界経済の減速や円高の進展を背景に、緩やかな鈍化傾向にあるが、2008年度、2009年度の大幅な落ち込みの反動もあり、年度を通じて見れば、輸出金額は前年度比 14.5%増と高い伸びが見込まれる。内訳を見ると、輸出数量は同 16.0%増と高い伸びとなるが、輸出価格は同 1.5%減と、円高の進行等により、2008年度(同 3.3%減)、2009年度(同 7.0%減)に続き下落する。

商品別に見ると、一般機械は、アジア・中東における電力向けの原動機や、新興国のインフラ整備、資源開発向けの建設用・鉱山用機械等を中心に高い伸びとなる。自動車は、中国を中心としたアジア、米国向けが堅調に推移するものの、EU 向けは政策効果の反動で弱い動きが続く。また、鉄鋼は、アジア向けの家電・自動車用を中心に増加傾向が続く。化学製品は、中東における生産能力増強の影響は限定的なものにとどまり、新興国向けを中心に、上半期に続き下半期も堅調な伸びが続く。一方、原料品は、全輸出品目の中で、唯一の前年度割れを見込む。鉄スクラップが、建設の低迷による発生量の減少で国内価格が高止まることに円高が加わり、価格競争力を失うことが主因。

#### ◆◆◆2011年度◆◆◆

新興国経済は通年で景気拡大が続き、下半期には先進国経済も景気回復が鮮明になることから、輸出は増加基調が継続する。輸出総額は、前年度比 4.0%増、輸出数量も同 4.0%増となる。輸出数量を水準で見ると、107.3(2005年=100として指数化)となり、2008年度(98.8)は上回るものの、金融危機前の2007年度(115.3)を依然として下回る。また、輸出価格は為替レートの影響が低減することを主因に横ばいとなる。

商品別では、鉱物性燃料、非鉄金属、船舶を除く品目で増加傾向が継続する。一般機械、鉄鋼、化学製品等は、引き続きアジア向けを中心に増加が続く。自動車は、海外生産の拡大等から増勢が鈍化する。自動車の部品は、海外生産の高まりを背景に拡大が続くものの、現地調達比率の上昇から、海外生産の拡大ペース程には増加しない見込みである。輸出額が減少する3品目においては、円高定着の影響に加え、鉱物性燃料では国内の生産調整の影響、非鉄金属・船舶では海外メーカーの台頭などが背景となる。

### 2. 輸 入

#### ◆◆◆2010年度◆◆◆

景気回復、前年度の反動等から、輸入総額は前年度比 13.9%増と高い伸びとなる。内訳を見ると、輸入数量は同 11.2%増と、4年ぶりの上昇となる。輸入価格は、資源価格上昇の影響はあるものの、円高の進展等を背景に、同 2.7%増と緩やかな伸びにとどまる。

商品別に見ると、原油及び粗油は、景気回復に加え、猛暑による電力向け需要の拡大等を背景に、輸入数量は増加するが、円高の影響により、総額の伸びは小幅にとどまる。衣類・同付属品は、下半期以降、原材料価格の上昇と主要輸入先である中国での賃上げ等により、価格が上昇し、輸入数量は減少する。総額では4年連続の減少を見込む。また、自動車は、日本メーカーの逆輸入車の増加から高い伸びとなる。半導体等電子部品では、PC向けは企業の買い替え需要の顕在化やスクールニューディール(全国の小中学校に対し、情報通信技術化などを進める政策)等を背景に増加。家電向けは、政策効果の影響から通年で拡大基調が続くが、自動車向けはエコカー補助金終了の影響から、下半期は落ち込む。

## ◆◆◆2011年度◆◆◆

輸入は、増加傾向が続くが、国内需要の低迷が続き、輸入総額は前年度比 1.0%増、輸入数量は同 0.5%増にとどまる。為替、資源価格ともに前年度並となることから、輸入価格は同 0.6%増と緩やかな伸びとなる見込み。

商品別では、原油及び粗油は、内需の低迷とこれに伴う生産調整から、減少傾向が継続。これに、精製設備の淘汰、新たなエネルギーソースへの転換という要因も加わる。また、半導体等電子部品では、PC 向けは、2010 年度に買い替えがある程度一巡し、増勢が鈍化する。DRAM 価格は、韓国、台湾メーカーの生産能力の拡大によって、低下圧力を受けるものの、減産が行われること、水準がすでに低いことから、ほぼ横ばいで推移する。

## V.経常収支の見通し

### ◆◆◆2010年度◆◆◆

輸出入金額とも大幅に増加するが、輸出の伸びが輸入を上回り、貿易収支黒字は 8 兆 1,120 億円と、前年度から 1 兆 5,120 億円増加する。サービス収支赤字は、旅行収支が海外からの旅行者の増加により受取が増加する一方、支払が減少することから、赤字幅の縮小が継続する。また、その他サービス収支は、仲介貿易手数料の受取増加等から黒字が継続する。所得収支黒字は、対外純資産の増加は継続するものの、円高の影響により、3 年連続で縮小する。この結果、経常収支黒字は 16 兆 6,970 億円と、2 年連続で黒字幅が拡大する。

### ◆◆◆2011年度◆◆◆

世界経済の回復、国内需要の低迷などから、前年度に引き続き、輸出の伸びが輸入を上回り、貿易収支黒字は 9 兆 7,760 億円と 2 年連続で黒字幅が拡大する。サービス収支赤字は、1 兆 7,270 億円と、赤字幅縮小の動きが継続する。所得収支は、経常収支黒字を背景とした対外純資産の増加により、黒字幅が 4 年ぶりに拡大する。この結果、経常収支黒字は 19 兆 2,320 億円となり、2006 年度、2007 年度に次ぐ過去 3 番目の高い水準となる見込みである。

## VI.前提条件

	2009実績	2010	2011
世界貿易 (暦年)	▲ 12.0 %	11.7 %	7.0 %
世界経済 (暦年・実質)	▲ 0.6 %	4.6 %	4.0 %
米 国	▲ 2.6 %	2.6 %	2.2 %
ユーロ圏	▲ 4.1 %	1.5 %	1.2 %
ア ジ ア	5.8 %	8.7 %	7.3 %
日本経済 (年度・実質)	▲ 1.9 %	2.6 %	1.3 %

(注1) アジアはIMF定義による「アジア途上国(26)」+「NIES(4)」の計30か国ベース。

(注2) 上記の前提条件に加え、11月中旬の外国為替市場および原油市場の動向を参考に、円相場は2010年度85円/ドル、2011年度85円/ドル、原油入着価格は2010年度80ドル/バレル、2011年度80ドル/バレルとの前提条件を以て積み上げ作業を実施。

以上